

Sincerity⑪

校長 菊田勇雄

町中が彼岸の匂ひしてをりぬ (稲畑汀子)

3月20日は二十四節気の一つ春分の日でした。この日は彼岸の中日にあたり、多くの人が寺院に詣でて祖先の墓参りをします。当日、県内は暴風雨が吹き荒れたため、私は翌日に父親が眠るお寺を訪ね、花を供え、手を合わせてきました。家族が無事に暮らしていることを報告し、これからも見守ってくれるように祈ってきました。寺院の周辺や墓地のある野辺は、祖先を祀る清浄な空気に包まれていました。

「暑さ寒さも彼岸まで」の言葉があるように、季節は暑さと寒さを交互に繰り返しながら、本格的な春に向かいます。学校は年度が変わり、新入生と着任する先生方を迎え、新たな体制でスタートします。新型コロナウイルス騒ぎが一日も早く終息し、令和2年度の教育活動が落ち着いた環境で展開できることを心より祈っています。

相高出身のオリンピック

新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大により、東京オリンピック・パラリンピック2020が1年程度延期されることになりました。3月26日に福島県を皮切りに行われる予定だった聖火リレーも急遽中止になりました。本校からは相馬太鼓部と吹奏楽部が相馬市で行われるセレモニーに出演予定でしたが、事前にキャンセルとなり、また、1年生には聖火ランナーを務める予定だった生徒もいました。ウイルス感染が世界的に終息し、大会が完全な形で開催できることを願うばかりです。

ところで、相馬高校の卒業生にオリンピック選手がいることをご存じですか。男子バレーボール元日本代表の佐藤哲夫さんです。佐藤さんは中村二小、中村二中を経て昭和39年に相馬高校に入学、監督の吉田孔彦先生の勧めでバレーボール部に入り、長身からの強力なスパイクを武器に活躍しました。42年に卒業し実業団の名門富士写真フィルムに入社、一年を待たずにレギュラーとなり日本リーグで活躍しました。また、日本代表チームのメンバーにも選ばれ、43年のメキシコオリンピックで銀メダルを獲得、47年のミュンヘンオリンピックで金メダルに輝きました。同年9月19日、来県した佐藤さんは木村県知事を表敬訪問、夕方、両親の待つ相馬に帰ってきました。翌日は本校で優勝報告を行い、夕方は市主催の歓迎会に臨みました。日の丸のエンブレムのついた真っ赤なブレザーを着た佐藤さんは、首から金メダルを下げ、生徒一人ひとりと握手を交わしました。出版局の生徒のインタビューでは、オリンピック開催中に起こったアラブ・ゲリラによるテロ事件や試合前の不安についての質問に誠実に答えています。

「オリンピックの場に政治や人種差別を持ち込んではいないと言われてはいますし、私も大変残念に思います。」
「不安というものはありませんでした。試合前に不安があったのでは勝てませんし、仲間の選手を信頼してプレーヤーとしての精神をつらぬき通しただけです。」

創立90周年記念誌『紅の旗』には、OBから生徒に寄せられたメッセージがあり、佐藤さんの文章も掲載されています。佐藤さんは「目標を持ちそれに立ち向う、力強い精神力を持った相高生であってほしい」という激励の言葉を寄せています。また、恩師吉田先生は佐藤さんを次のように評しています。『性格が明るくて、自分にプラスになることは、誰が言うことでも、受け入れた。そういう性格が、オリンピック選手に認められたのだらう。』

佐藤さんの活躍は本校の長い歴史に刻まれた金字塔であり、私たちは相高出身のオリンピックで金メダリストがいたことを忘れてならないでしょう。

【参考】相馬高校新聞第55号・67号

佐藤さんの凱旋を伝える福島民報



卒業証書授与式が挙行されました

3月1日、普通科第72回、理数科第49回卒業証書授与式が行われました。当日は新型コロナウイルス感染拡大に伴い、参加者を卒業生、保護者、教職員、来賓の一部の方々に絞り、在校生の参加は見合わせ、同窓会・PTA会長の祝辞を割愛するなど、規模の縮小と時間の短縮に努めました。参加者にはマスクの着用を求めるとともに、体育館入口には消毒液を置きました。また、保護者の出入口を卒業生とは別々にし、式終了後のホームルームは卒業生と担任だけで行いました。

式典では普通科127名を代表して荒佑真君に、理数科39名を代表して久米本陸君に栄えある卒業証書を授与し、次に私から式辞を述べました。予測困難な社会の変化の中で人間らしく心豊かに生きるための手掛かりとして、アメリカの心理学者ゴードン・オルポートの言葉を引用し、成熟した人格を目指しながら、自分の能力を開花させ様々な分野で活躍することを願い、卒業生の中から相馬を支える人材が出ることを期待していることを伝えました。

在校生代表として送辞を述べた中塚涼太君からは、「相馬高校で培った経験と学んだこと、思い出を糧に、信じた道を若駒の如く突き進んでください。どんな逆境も乗り越え、新たな地でも希望と夢を胸に輝き続けられると信じています」と励ましの言葉がありました。

また、卒業生代表として答辞を述べた伏見葵君からは、3年間の歩みを振り返った後、「広い視野を持ち、多様な価値観の人々と手を取り合って生きていくにはどうしたらよいか、考え、行動していきたいと思います。そして、校訓である『至誠』の精神を胸にも誠実に一歩一歩、歩んでいきます」と誓いの言葉がありました。

今年度は異例の形となりましたが、厳粛な雰囲気の中で卒業生を送ることができました。



前期選抜合格者発表

3月16日、前期選抜合格者発表が行われました。普通科114名、理数科37名、計151名が合格を果たしました。当日は講堂前に設置されたボードに合格者一覧が貼られ、自分の受験番号を見つけた受験生たちの歓喜の輪が、あちらこちらに広がりました。3月27日は予定通り新入生オリエンテーションを行います。本校での学習活動と学校生活について説明がありますので、体調を整え保護者同伴で来校してください。



健闘！ 国公立大学合格状況

3月24日、国公立大学後期日程試験の合格発表が終了し、今年度の大学合格者数が確定しました。受験した3年生一人ひとりが目標達成のため、最後まで粘り強く取り組み、昨年度を大きく上回る結果を残してくれました。特に、東北大学、筑波大学などの難関大学に合格者が出たことは朗報でした。また、私立大学では一般入試で早稲田、上智、明治、中央、同志社など有名私立に合格した生もおおし、相高生の潜在能力の高さを示しています。このような3年生の頑張りは、在校生にとって目標になることと同時に、大きな励みになるでしょう。3年生はこれから自分で選んだ道を歩むことになりますが、勝負はこれからです。長い人生で何を学ぶのか、出身大学が問題ではありません。大学で何を身につけるのか、大学で何を身につけたものを将来にどう活かすのか、これが大事です。大学で身につけたものが、その後の人生を決めるのではなく、過言ではありません。大学入学はゴールではなく、スタートです。大学で青春を謳歌する新たなスタートです。大学で青春を謳歌する身にとともに、卒業後に実社会で役に立つ力を身につけること、様々な分野で活躍して欲しいと思います。



校内授業研究 Part 5

【1/28】新明祐生先生の2年地理Bの授業は、学年末考査が近いことから、生徒自らが試験問題の作成を通じて、思考力と判断力を高めるユニークな内容でした。生徒たちはグループごとに教科書や資料集を使って試行錯誤しながら、「資源と産業」に関する問題を作成し、他班の生徒に出題することで問題を再度吟味するなど積極的に取り組んでいました。



【1/29】岡島静寿先生の2年生物の授業では、アルコール発酵実験の培養時間を利用して、コハク酸脱水素実験が行われました。生徒たちは班別の実験を行い、酵母菌によるアルコール発酵で起こる反応を確かめるとともに、クエン酸回路で働くコハク酸脱水素酵素の働きを、メチレンブルーの色の変化を利用して観察しました。



【1/31】根本知樹先生の1年社会と情報の授業では、パワーポイントを使って「私のおすすめの本」を紹介するプレゼンテーションが行われました。生徒各自が本の魅力を伝えるため一所懸命発表する姿が印象的でした。発表が終了するたびに全員が評価シートに評価とコメントを記入する工夫もみられました。



白土あゆみ先生の2年現代文の授業は、多木浩二氏の「消費されるスポーツ」を読み、アメリカの大衆消費社会とスポーツの関係に理解を深め、評論文に対する読解力を高めることをねらいとしたものでした。プリントの問題を解きながら内容を理解させたり、グループ活動を取り入れて対話的な学習を促したりするなど工夫が見られました。



川村智先生の2年コミュニケーション英語IIの授業は、前半はプリントを使用して英単語を効果的に習得する活動が行われ、後半はIPADを使ってGoogle翻訳の検索エンジンに英文を入力し日本語訳を確認したり、日本語を入力し対応する英文を確認したりするなど、語彙を獲得しながら表現力を高める工夫が見られる先進的な授業でした。



〈おわり〉

学校に行く意味について ~ある中学生の投書より~

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、3月2日より全国の小中学校・高等学校・特別支援学校が臨時休業に入る中、3月20日付け朝日新聞「声」に掲載された中学生Y君の投書に感銘を受けました。概略は以下のとおり。

学校から課題が出され、塾もネットで授業を無料配信し、友人とはメールで連絡が取り合うことができ、読書など好きなことをする時間もあふれ、何と不自由な生活をしている休業中であって、Y君は「わざわざ学校に通学する意味は何だろうか？」と自らに問いかけます。そして「学校に行く意味」について次のように述べています。

①学校に行けば苦手な人と顔を合わせたり、嫌いな教科を勉強したり、退屈な時間を過ごすこともあるが、それ自体が何にも代えがたい味わいがある。

②好きなことばかりを選び取るのは良くない。

③学校では勉強だけでなく、人との関わりや課題を乗り越える力、生きていくために必要な力を学ぶ。最後は「余裕がなく、騒がしくて息苦しいほどのあの日々が愛おしく、また、今を少し物足りなく思っている」と結んでいます。学校に行く本質的な意味を掘り下げ深く考えている点に感心すると同時に、中学生にしてこの感性と語彙力の高さに驚くばかりでした。

同窓生列伝⑪ 折笠晴秀 (1885-1965) 続編

~折笠の診察を受けた文豪志賀直哉の日記~

太平洋戦争中、折笠は戦災を避けるため故郷の小高町女場に家族と疎開しました。東京から送らせた医療機器などの荷物を自宅に運ぶ際は、隣近所の人たちが手伝ったそうです。また、疎開中、折笠は近所の人たちが病気になる時は診察を進んで引き受けました。空襲により病院は焼失しましたが、自宅は幸いにして空襲を免れました。戦後は神奈川県湯河原町に病院を移転すると、泌尿器科の権威となっていた折笠のもとには患者が多数来院しました。その中には著名人もおり、白樺派を代表する小説家志賀直哉もその一人でした。直哉の家系は旧相馬中村藩士の出で、祖父直道は相馬家の家令を務めました。そのため直哉は3歳から8歳までの間、祖父父母のいる旧藩主邸で暮らしています。直道は窮乏する相馬家の財政を立て直すため、古河市兵衛の足尾銅山事業に投資し成功を収めました。直道が家令を辞めた後、足尾銅山鉱毒事件が表面化し、事件がもとで直哉と父直温との間には不和も生じました。直哉は短編『祖父』の中で尊敬する祖父について次のように記しています。「僕の祖父は相馬家の家令をしていたが、徹底して、死ぬまで相馬家のために骨を折った。」

昭和27年から直哉は折笠の診察を受けたようで、同年4月28日の日記に、「(前略) 廣津に勧められ湯河原の折笠晴秀医師に腎臓を診察して貰う事にし、十時半のバスで湯河原駅に行き、福田蘭堂と落ちひ、連れて行って貰う。相馬出身にて学生時代三河臺の家にも来た事あるといふ。自分も折笠が順天堂の若い医者で阿久津三郎氏の助手時代その方の病気に世話になった事あり、(後略)」と記しています。当時、熱海に住んでいた直哉は、友人で文芸評論家の広津和郎、音楽家の福田蘭童と一緒に出かけます。この時、直哉は折笠に尿検査と前立腺肥大検査を施してもらい、異状なしの診断を受けました。折笠が尻に指を入れて前立腺を触診したことや、水虫治療のため太陽燈を使った紫外線療法を行ったことも赤裸々に記しています。二人は初対面ではなく、折笠が学生時代に麻布三河台にあった直哉の自宅を訪れたことや、順天堂時代に折笠が直哉を診察したことも記されています。また、5月12日の日記には『折笠晴秀医師への著書を福田に頼む。』、5月15日の日記には『康、壽、貴美同伴「いでゆ」にて上京、福島、田岡、折笠夫妻と一緒に行く、東京駅で三楽病院へ行く三人に別れ、一人でブリッジストーン美術館に行く。』という記述があり、直哉は自分の著書を折笠に贈ったり、折笠夫妻と東京・伊東間を結ぶ準急列車と一緒に上京したりするなど、親しい間柄となっていたようです。まさに相馬ゆかりの二人の交流には興味が尽きません。【参考】『志賀直哉全集 第8・11巻』